



56  
m. 1

No. 7  
201

十 1  
4127  
1





4127

田中芳男  
成島謙吉  
全譯

# 學業捷徑

初編

明治八年  
三月稟準

田中氏藏板

厚明  
藏書

學業捷徑緒言  
此書ハ法國巴里府ノ學士ベレエズ氏ノ箸ス所  
リ此人曾テ學校ニアリシ時中小學校ノ生徒  
既ニ卒業ニ至リテ尚學術ノ基原、創製、發明及ヒ  
農工兩業ノ事ニ暗フシテ麵包、葡萄酒、砂糖、油、塩、  
石鹼、革、布、陶磁、玻黎ソノ外今日人世ニ必需ナル  
諸物ノ如キモ如何シテ製造スルヤヲ知ラザル  
トヲ歎シ此ニ於テ簡易ナル書ヲ編選シ學校中  
ノ一教科トナシ生徒ヲシテ諳誦諳記シ知識ヲ  
擴充セシムル者ニシテ全編ヲ分チテ五部トス

學業捷徑緒言



即チ

第一部 農業 農法 農産

第二部 工業 工法 工産

第三部 創製 發明

第四部 學藝 美術

第五部 救恤場

右ノ内初ノ二部ハ生徒ニ切要ナル事業多ケレ  
バ其說殊ニ多クシテ其數一百章ニ及ビ次ノ三  
部ハ漸ク合セテ唯六十章アリ全編總テ一百六  
十章ノ小冊子ナリト雖モ學術及ヒ工業ノ事ニ

於テ包羅蒐集シテ漏スヲナシ實ニ學業ノ綱領  
ヲ了解セシムルノ捷徑ナリ因テ譯メ學業捷徑  
ト名ク昔々今其音精ハ味ハハ古ニ異ニ思  
此書タルヤ簡易ヲ主トスレバ其文極メテ短シ  
故ニ譯スルニ當リ其說ノ不全ニシテ意味ノ通  
暢セサルハ他書ヲ比較シテ之ヲ補フニ善末  
今農業ノ部ヨリ五十章ニ至ルヲ以テ初編トシ  
工業ノ部ヨリ第一章ニ至ルヲ以テ二編トシ  
其以下ヲ以テ三編トス爾後幾ノ章ニ於テ其  
此書ハ紀元一千八百五十四年ノ選ニシテ今ヲ



距ル一二十餘年前ナレバ各業ノ進歩ニ於テ差  
 異ナキ一能ハズ因テ法國物産ノ章ニ於テ畧其  
 異同ヲ辨ズト雖モ其他ノ如キハ他日新選ノ書  
 ニ校シテ之ヲ改正増補セントス  
 此書ハ生徒ヲシテ暗記セシムルヲ以テ卷末ニ  
 問題ヲ設ケタレト今省キテ譯出セズ意和ハ直  
 譯字ハ既ニ譯出スル諸書ニ因ルト雖ト又新ニ  
 製スル者多シ今其音譯ト和名ハ右方ニ畧シ原  
 語ハ左方ニ畧スル者ナリ  
 明治八年二月 譯者識

初編目次

- 第十章章 農業總論
- 第九章章 土地之種類并地質之事
- 第八章章 土地之美良ニル法并犁田之事
- 第七章章 肥糞之事
- 第六章章 穀類之事并麥
- 第五章章 裸麥并大麥并燕麥
- 第四章章 穀類并收并打穗
- 第三章章
- 第二章章
- 第一章章



第十章 稻米  
 第十一章 玉蜀黍即玉米  
 第十二章 養根蔬菜 馬鈴薯  
 第十三章 茶葉 胡蘿蔔 蕪菁  
 第十四章 畜食草菜 天然草野  
 第十五章 人造草野 艾草之業  
 第十六章 替作 休耕  
 第十七章 樹園 樹林  
 第十八章 林樹 山毛榉 榆樹等  
 第十九章 林樹 米國楓樹 白楊樹等

第二十章 開墾之業 水除事  
 第二十一章 菓樹 接樹之業  
 第二十二章 高幹菓樹 軟幹菓樹  
 第二十三章 蔬菜  
 第二十四章 他種蔬菜  
 第二十五章 葡萄樹  
 第二十六章 阿利襪樹  
 第二十七章 植物 收納 蟲  
 第二十八章 油料植物 纖維植物  
 第二十九章 染料植物



第三十章

藥用植物

第卅一章

花草培養

第卅二章

素樹 フイブロン 蛇麻草 烟草

第卅三章

地上菌 キノコ 地中菌

第卅四章

綿花樹 コットン

第卅五章

辛香料

第卅六章

茶

第卅七章

茄菲

第卅八章

甘豆餅

第卅九章

家畜

第四十章

初編上 割牛 牝牛

第四十一章

馬

第四十二章

驢 牝驢 乳汁 騾馬

第四十三章

最業總 割羊 牝羊

第四十四章

山羊 家豚

第四十五章

世界創家畜保護

第四十六章

家禽 雞 牝雞

第四十七章

墨斯哥鷄 鷓鴣 鴛鴦 鴿

第四十八章

蜜蜂 蜜蠟 蜂蜜

第四十九章

蠶 繭 蠶絲 蠶品



第五十章

法國土地并農產物品

目次畢

第一章	農業總論
第二章	田圃及土地
第三章	耕作スルノ術
第四章	神記
第五章	曰亞瑞
第六章	ト厄被ノ間ニ設タル第一子加印ハ農業ヲ務メ
第七章	其弟ノ亜別兒ハ牧羊ヲ司ルト云フ又聖經ニモ
第八章	昔在神世ノ人ハ質朴純粹ナル風習ナルヲ賞記
第九章	シ又當世ノ人ハ多ク耕作シ牧畜スルニ注意

農業捷徑初編上

高衣ノ人ハヤキク田中芳男 同譯

第一章 農業總論

農業トハ田圃及土地又耕作スルノ術ニシテ

其古キハ世界創立ト同時ナリ神記ニ曰亞瑞

ト厄被ノ間ニ設タル第一子加印ハ農業ヲ務メ

其弟ノ亜別兒ハ牧羊ヲ司ルト云フ又聖經ニモ

昔在神世ノ人ハ質朴純粹ナル風習ナルヲ賞記

シ又當世ノ人ハ多ク耕作シ牧畜スルニ注意



セリト云ヘリハ昔農業ヲ榮譽トセシ頃ハ人民皆質素節儉ヲ  
往昔農業ヲ榮譽トセシ頃ハ人民皆質素節儉ヲ  
主トシ真ニ愛國ノ志ヲ備ヘタリシ又羅馬共和  
政治初期ノ間ハ其高官、議官、コルネリウス統政官ノ如キモ田  
圃ノ事ヲ務メテ自己ノ榮トセリ又戰時三軍ヲ  
統轄スルノ將校モ一度強敵ニ勝ツキハ再ヒ故  
園ニ歸リ犁車ヲ御スルノ職ヲ務ムト云フ  
農業ハ國家ノ幸福ト富饒トヲ致スノ基礎ナレ  
バ王族ト雖モ之ヲ務メザルヲ得ズ第四世シロイ諳利  
ハ法國王中卓越高才ノ人ナリシガ常ニ自國人

民ノ毎日曜日ニハ各一羽ノ牝鶏ヲ鍋中ニ入レ  
ンヲ望メリ且其王ノ思慮ヲ補助スル大臣須  
利氏アリ此人ハ最忠心事奉仕セシモノニシテ農  
業ニ就テ一言アリ其辭ニ曰ク中興業ヲ以テ  
夫レ耕圃ト牧畜ト二業ハ我法國ノ雙乳ナリ  
之ヲ以テ國ヲ養育スル恰モ白露國ノ鑛山ニ  
於ルカ如シ  
實ニ大臣ノ云ヘル如ク土地ノ物産ハ無限ノ寶  
貨ナレバ農業ノ盛ナル國ニ於テハ百般ノ事業  
皆盛大ヲ極ムルモノナリ



農業ヲ他ノ職業ニ比較スルニ有益ナルヲ多シ  
 人生ノ壯健ヲ維持セシメ又肢體ヲ強クシ純朴、變  
 化、溫柔ノ樂ヲ自得セシメ又靜定、順序、整正ノ事  
 ヲ備ヘ能ク國法ニ服從セシム又天造物ノ盛大  
 ナルト造物者ノ恩賜ヲ實檢スル故ニ聖神ヲ尊  
 敬スルノ意ヲ生ズ識者曾テ農業ニ就テ云ヘル  
 「アリ總テ生計ヲナス職業ノ中農業ヲ以テ最  
 モ榮譽ノ者トス」  
 第二章 土地ノ種類并地質之事  
 凡ソ地ハ同緯度ニアリト雖モ必ス豊熟ヲ同フ

スル者ニ非ス又何レノ地モ同シク適スルヲナ  
 シ然トモ各人ノ注意ト學術工業ノ助ニヨリ各  
 種ニ宜シキ地トナルモノナリ  
 耕耘ニ適當ナル地ノ部分ヲ耕作地即チ生植地  
 ト云フ人ノ勞動ニ徒ヒテ產物ヲ生出ス生植地  
 ハ腐土即次地ニシテ特別ナル物質ヲ備フル故  
 ニ至テ沃饒ナルモノトス此物質ハ黑色ニシテ粘  
 着力アリ是動物、植物等ノ質ヲ空氣、水濕、溫熱等  
 ノ助ニ因テ化シ土ト混和セシモノナリ腐土ハ  
 農夫務テ地中ニ厩肥及ヒ他ノ肥糞ヲ埋ムルニ



ヨリ次第ニ増加スルモノナリ又植物ノ根蔓延  
 スベキ地層ハ厚サ大約惡地ニテ一二寸良地ハ  
 三尺餘ニ至ル是ヨリ以内ヲ耕地下部ト云フ皆  
 鑛性ノ岩石ナレド徐々ニ耕作生植ノ地ニ變セ  
 シムベシ  
 三元質トハ粘土、砂土、灰土ノ三種類ニシテ其質各  
 異レリ皆腐土ト合メ耕作地トナル其三質ノ量  
 各殊ニ混和シ始テ土地ノ差等ヲ生ス因テ此質  
 ノ耕作地中ニ在ル量ニ從ヒ地味ヲ三種トス即  
 其一ヲ粘土地其二ヲ砂土地其三ヲ灰土地ト名

之粘土地ハ多少粟、黄、赤等ノ色ヲ帶ヒ粘着力ア  
 リ是又農具ニ粘着ス雨降ノ節ハ水ヲ維持シ乾  
 燥ノ時ハ地面罅裂ハ砂土地ハ前ニ反對セル質  
 ヲ備ヒ灰土地ハ多少白色ヲ帶ビ常ニ乾燥シ大  
 陽ノ光線ヲ反射シテ土中ニ入ラシメザレバ外  
 面ニアル植物之ガ為ニ大害ヲ受ク  
 第三章 土地ヲ改良ニスル法并犁田ノ事  
 自然ニ任スルハ耕作地ト雖モ產物ヲ生殖スル  
 ニ適スル物質ヲ具フテ甚稀ナリ故ニ其適宜ナ  
 ル法ヲ用ヒ成ル可キ丈ケ沃饒ナラシムベキ物



質ヲ其地ニ施スベシ其土地ヲ美良ナラシムニ  
 二ハ三種ノ方法アリ即チ耕耘改革肥糞是ナリ  
 耕耘トハ總テ器械ヲ用テ地ヲ調和スルコトニシテ  
 即チ土ヲ動カシ之ヲ分チ根ノ蔓延スルヲ得セ  
 シメ雨水又空氣ヲ通シ光線及温熱ヲ達セシム  
 ルナリ耕耘ヲナス器ニ三種アリ鏟ヲ以テスル  
 アリ鋤ヲ以テスルアリ犁<sup>カキ</sup>ヲ以テスルアリ圃ヲ  
 耕スニハ多クハ鏟ヲ用ユ鋤ノ形ハ三角ナルア  
 リ四角ナルアリ或ハ釵子形ナルアリ葡萄ヲ作  
 ル農夫或ハ牛馬ヲ所持セザル農夫等常ニ之ヲ

用ユ犁ハ其用ユベキ地ノ模様ニ從ヒ簡易或ハ  
 重大ナル製造アリ皆牛馬ノ力ヲ要ス大耕耘ヲ  
 ナスニハ必ス之ヲ用ルモノナリ犁ノ用ヲナス  
 部ヲ截刀、犁頭、斜胴ノ三トス、截刀ハ尖銳ナル鐵  
 製刀ノ類ニテ地面ヲ直線ニ割リ雜草及地中ノ  
 根ヲ截切ス犁頭モ亦鐵ニテ作ル者ニテ截刀ノ  
 始ル動作ヲ追ヒ地下ヲ平面ニ穿ツ其土壤ハ斜  
 胴ノ上ニ至リ傾タル方ヘ降ル斜胴ハ堅材ニテ  
 造リ犁ヲ以テ穿タル所ヲ容易ニ過ル為メ滑澤  
 ニ磨礪スベシ



犁ハ土地ヲ割截シ堀起スベキ模様ニ從テ各其形ヲ異ニス一ニ輪アル前車ヲ附ル犁アリ是硬地ヲ耕スニ用ユ又前車ナキアリ名ケテ單犁ト云フ此具ヲ耕耘ニ使用スルニハ雨後ニ地ノ尚潤フキヲ撰ブベシ然レ濕潤ニ過ル片ハ却テ惡シ犁ノ堀起シタル畝間ノ凹所ヲ再ヒ埋ムル者ヲ呼テ平面耕耘ト云フ土地ヲ堀起シ畝ヲ作り其兩側ニ土ヲ累積スルヲ成畝耕耘ト云フ

第四章 耙壤 播種 并 雜草除去之事

地ヲ耕耘シタル後ハ必ス土ヲ碎クベシ其動作

ヲ成ハ耙ト名ル器具ヲ用ユベシ其形三角或ハ四角ニノ多ク柄子アリ之ニ鐵又木製ノ齒又並列スル者ナリ

耙ハ一馬ニ駕セシメ播種シタル地又ハ耕タル地ヲ通過セシム是犁ニテ雜草及草根ヲ除ク為ニ堀タル土塊ヲ調和シ又之ヲ破碎シ或ハ播タル種子ヲ埋ムルノ用ヲ成スナリ耙ハ土塊ヲ破碎スル為メ強力ヲ要スルニヨリ最モ迅速ニ通過セシムベシ故ニ此動作ニハ牛ヨリ馬ヲ撰用スベシ



土塊ヲ破碎スルニ犁ト耙トノ兩事業ヲ行フテ  
 後尚其地ヲ平坦ナラシムルニハ軋土器ヲ用ユ  
 即木、石、鑄鐵等ノ圓筒ヲ畜獸ニ牽カセ地上ヲ運  
 轉通過セシムル者ナリ  
 廣ク田圃ニ種ヲ下スニハ常ニ播種ノ法ヲ用ニ  
 即チ農夫一ノ深囊中ニ穀粒ヲ入レ之ヲ腰間ニ  
 帶ヒ畝ヲ量リ囊中ヨリ握出シ左方へ散播スベ  
 シ而シテ種子ニ疎密ナカラシムルニハ播種ニ當  
 リ好天氣ヲ撰ブベシ又土地ノ種類ニ因リ厚ク  
 蒔クベカラズ是其植物自由ニ成長スベキ距離

ヲ備ヘズシテ養分ノ地ニ乏シキガ故ニ終ニハ  
 枯死スルニ至ルベシ又柔ナル地ハ硬キ地ヨリ  
 ハ多ク播種スルヲ佳トス  
 雜草ヲ除去スルノ目的ハ其耕作ニタル植物ニ  
 害アル草ヲ指又小器械ヲ以テ拔取ヲ云フ  
 裸麥義、譯瓜、義瞿麥譯、義罌粟譯、義花薊譯等ノ如キ草ハ自然  
 ニ成長スルヲ早クシテ其地味ヲ多ク吸收シ穀  
 種其他ノ播種子ヲ疲勞セシムルニ至ル  
 且ツ雜草ノ除去ハ耕作セル植物ノ莖葉ニ空氣  
 ト光線ノ勢力ヲ與ヘ又其根ニ多ク養分ヲ吸收



セシムル為ノミナラズ尚其穀物ニ雜草ノ種子  
ヲ混交シテ其品位ヲ墮サバラシムル為メニ其  
雜草ヲ成實セシメザルナリ

第五章 土地ノ改革

土地ノ改革トハ土地ノ性質ヲ變シ良善ナラシ  
ムル為ニ人エヲ以テ其地ニ施スノ法ナリ譬ハ  
乾燥ニ過ル地ニ滋潤ヲ與ヘ水濕ノ地ヲ乾枯セ  
シムルト柔ニ過ル地ヲ固メ硬地ヲ柔脆ニスル  
等ナリ  
土地ノ改革ハ土地ノ性質ニ因テ施行スルノ法

ヲ異ニス今之ヲ明了ニ示サン此法ヲ行ハント  
スルニハ砂、粘土、灰坭、石灰等ヲ用ユ粘土地ヲ改  
革スルニハ砂ヲ混和シ砂地又灰地ニハ粘土ヲ  
混和シテ改革スヘシ然レトモ必ス是ヲ以テ成  
功スルヲ難シ是其砂ハ粘カ強キ粘土ト混和ス  
ルヲ欲セズ又粘着質アル粘土ハ殆んど細粉ト  
スルニ非レバ砂土ト合一スルヲ得ズ故ニ灰坭  
ヲ用テ之ヲ助クヘシ此物品ハ混合シ易キノミ  
ナラズ之ヲ施スノ亦容易ナレバナリ  
灰坭ハ各種ノ土相混和シテ成ルト雖モ其物質



ノ量ハ各同シカラズ或ハ石灰質ノ多キヲアリ  
又粘土、膠泥等其中ニ在リ其他砂、砂礫ヲモ混セ  
リ灰坭ハ生植地層ノ下部若干深淺ノ所ニアリ  
其性質汰饒ナラザレバ單用シテ耕作ニ適セズ  
然トモ肥養トナルベキ性質ヲ含有スル者ナリ  
灰坭用法ヲ審ニ辨シテ之ヲ施用セバ豊饒ナル  
成功ヲ奏スベシ農夫ハ改革スベキ地ニ從フテ  
灰坭ノ分量ヲ撰ムトニ注意セントヲ要ス若シ  
其地粘土ニシテ硬キ者ニハ少ク砂ヲ帶タル石  
灰質アル者ヲ良トス又柔ニシテ疲瘠ナル地ニハ

粘土分ノ多キ灰坭ヲ施スベシ灰坭ヲ用ルノ時  
期ハ秋季ヨリ初冬トス初メ灰坭ノ小塊ヲ地上  
ニ置キ自然ニ破碎シテ細粉トナルニ及テ之ヲ  
一様ニ散敷シ深ク耕耘シテ之ヲ地下ニ埋ム  
石灰ナル者ハ礦石ノ屬ニシテ之ヲ竈中ニ焼テ  
白灰トナセシ者ハ灰坭ノ代用トス此モノ地ニ  
益アルヲ灰坭ニ勝リ植物ヲメ強カラシム然ト  
モ何ノ地ニモ適當スル者ニ非ス新ニ開墾セル  
地ヲ始テ耕作スルニ方リ施シテ最モ良シ  
第六章 肥糞之事



植物ヲ滋養シ地ノ沃饒ヲ保存セシムル諸物質  
ヲ名ケテ肥糞ト云フ毎年收穫アル毎ニ地ノ榮  
養部分ヲ減少スベシ故ニ必ス其消耗ヲ補ハザ  
ル可ラズ之ヲ行フニハ先ツ肥糞ヲ用ユベシ然  
ラザレバ其損失ヲ贖フヲ能ハズ之ヲ名テ地ニ  
肥糞スルト云フ  
一般ニ用ル肥糞ハ厩肥ト名クル馬、牛、羊等ノ如  
キ家畜ノ寢藁ニ供セシ後ノ藁草ナリ是レ家畜  
アル家ニ於テ得易ク且ツ最良ノ肥糞ナリ  
農家ノ厩肥ハ常ニ畜ヲ所ノ獸糞及ヒ寢藁ヲ混

交シタルモノナリ又地ノ質ニ從ヒ各共用ル所  
ヲ異ニス譬バ角獸糞ノ如キハ粘着スルノ氣ア  
リテ質冷ナル故ニ柔地、乾地、砂地等ニ用テ可ナ  
リ馬及ヒ羊糞ノ如キハ温氣ヲ含ムノ効アル故  
寒濕ノ地ニ施スヘシ  
毛獸ノ厩肥ヲ直ニ地ニ施スニハ欄養法ヲ用フ  
ヘシ其方法ハ自在ニ運搬スベキ小欄ノ中ニ羊  
ヲ養ヒ肥糞ヲ施コスベキ地上ニ置キ一夜ヲ通  
宵セシメ其地ニ直ニ肥糞ヲ施サシム其欄ヲ結  
ブ局地ノ廣サハ各凡三尺餘ナル平方ニシテ是



フ一羊ノ一夜ニ肥糞スルノ地ト定ム  
 又豌豆、蚕豆、油菜、苜蓿、蕎麦等ノ植物ヲ平常ヨリ  
 密ニ下種シ開花ノ頃ニ至リ之ヲ埋覆ス名ケテ  
 緑肥ト云フ  
 緑肥ハ殊ニ温帯ノ地ニ宜シク且ツ濕地ヨリ乾  
 地ニ最モ適當スル者ナリ  
 凡ソ草木ノ灰殊ニ滷汁ヲ取タル後ノ灰ハ粘土  
 密着セル地、濕氣ヲ含ムノ地ニ肥糞トシ或ハ土  
 地ノ改革ニ用ヒテ其功ヲ奏スルモノナリ  
 千七百年代始テ農業ノ用ニ供シタル石膏粉即

硫酸石灰ハ零陵香、苜蓿、紅苳草ノ如キ人造草野  
 ニ施シテ最モ貴キ肥糞ノ一トス  
 牧草ノ萌生シテ四寸餘ノ高ニ至ル者ニ石膏粉  
 ヲ散敷スルニハ朝夕ノ露アル時或ハ雨降前後  
 風ナキ曇日ニ施シテ可ナル者ナリ而シテ之ヲ  
 行フ時期ハ春月ヲ常トス  
 第七章 穀物ノ事并麥  
 穀類ト名クル植物ハ即小麦、裸麦、燕麦、大麦、蕎麦、  
 稻米、玉蜀黍等ニシテ之ヲ最モ緊用ナル産物ト  
 ス皆一年生ノ草本ニメ五六個月間ニ成熟ス決



ノ一年ヲ越ルコトナシ穀類ノ莖ヲ名ケテ藁ワラ稈カサト云フ各種ノ用ニ供シ殊ニ家畜ノ保存ニ用ユ又穀粒ハ細粉トシ開化人民食用ノ基礎ト夫レ上ノ地ナシ此植物ノ中ニ熱帯ノ地ニ生ズル者アレハ温帯ノ地ニ産スル最モ多シ又歐州北部ノ長キ冬ヲモ怯レザルモノアリ此等ハ雨澤少ク此諸種穀物ノ中最モ要用ナル者ハ小麦ナリ故ニ之ヲ其第一等ニ置ザルヲ得ズ器具ノ製作人民ノ安逸即チ開化ノ交際等皆此貴キ植物ノ産

出ニ由ルモノトス故ニ麦粉ヲ以テ上好ナル麵包ヲ製ス又麦粉ヨリ分レタル麦アベ麩アベハ家畜ノ食餌ニ宜シ殊ニ家畜ヲ養フノ料トス麥稈ハ畜獸ノ寢藁及ヒ食料トス麥ハ何ノ地ニモ生スルト雖モ粘土或ハ灰土ノ量多キ地ニ適ス且其地ハ肥糞ヲ施シ能ク培養スルヲ要ス麦ノ播種ハ第十月ニ行ヒ冬季ノ地上ニ過ギシメ翌年七八月ニ至リ收穫ス此外春麦ト名クル各種ノ小麦アリ春月種ヲ下シ三四個月ノ後收穫スル者ナリ



麥ニ病患アリ名ケテ腐敗カクイスルカクイ腐敗ニエ黒奴ニ糖ニ粉ニ生ニ黒  
ズル鏽斑ルイ莖葉ニ鉄鏽ルノ如キト云フ大ニ收穫ノ  
 患害ヲナス此病ヲ避ルニハ其種子ヲ下ス前若  
 干時間石灰水ニ浸シ或ハ種子ヲ灰汁ニテ洗ヒ  
 後之ニ石灰ヲ散敷セテ後ニ下種スヘシ  
 第八章 裸麥 大麥 燕麥  
 裸麥ハ小麦ニ亞ギテ最用アル穀類ナリ其生草  
 ハ獸畜ヲ養フ秣草ノ一ナリ其乾キタルハ寢藁  
 ニ供スベシ又其稈ハ藁匠多クコレヲ用ヒ其穀  
 粒ハ家畜ヲ養フ之ヲ粉末トシ麵包ヲ製ス其味

美良ニメ久ク貯フベシ裸麥ハ寒地ト雖ニ性ル  
 下ナク清浄ナル地ニモ又能ク調和シタル地ニ  
 モ適ト雖ニ濕氣多キノ地ニハ適セス且ツ凝固  
 セル粘土ノ地ヨリハ輕柔ナル地ヲ選ブベシ播  
 種ハ秋月麦ヲ蒔ク前ニ施ス寒地ハ成ベク早く  
 蒔クベシ之ヲ收納スルハ七月ナリ又別ニ一種  
 アリ春麦ト同ク春季ニ播種スル者ナリ  
 大麥ハ小麦及裸麥ニ亞テ必要ナル者トス穀粒  
 ハ家畜ヲ養フニ用ヒ又此穀粉ヲ小麦粉ニ和スレ  
 バ良キ麵包ヲ作ル多ハ麵ヒキ麵ワリテ麦酒ヲ釀造シ又



ハ焼酎ヲ作ル其稈ハ乾草トシテ一般ニ稱用ス  
大低冬中ニ播種スレト又翌春ニ施スヲアリ其  
後三ヶ月ヲ經テ稍成熟シ六月ノ末ニ刈獲ス大  
麦ハ能ク調和セル地ニ適當ス  
燕麦ハ家畜ノ食料トス其皮殼ヲ去リ麩麩テ食  
用シ甚タ淡泊ナリ又之ヲ煎ジタル者ハ緩和藥  
トスベシ播種ハ大麦ヲ春季ニ施ス如クスベシ  
收穫ノ期ハ大麦ヨリ稍遲シ又他ノ穀類ノ如キ  
培養ヲ用ヒズシテ何ノ地ニモ能ク成長ス  
蕎麥ハ一般ニ又黒麦トモ稱シ家畜ヲ養フ其粉

ハ麵包トシ淡味ナル者ナリ又之ヲ肥糞ニ用ル  
ニハ稠密ニ播種シ花ノ開ク期ニ至レバ反覆シ  
地中ニ埋メ緑肥トス  
黍稷ハ他ノ諸穀ヨリ必要ナラザル者ナリ然ト  
モ其穀粒ヲ細粉トシテ羹トス或ハ菓子ニモ  
製ス其味極テ美ナリ又家禽好テ此穀粒ヲ喰フ  
故ニ肥滿セシムル為ニ最良品トス又之ヲ耕作  
シテ秣草トスルアリ  
第九章 穀類刈取并打穂  
穀粒ノ成熟スルニ及ビ其莖稈ヲ刈收ス之ヲ施



スル時節ヲ知ハ從來ノ試驗ニアリ穀ニ施ス者  
ヲ名ケテ刈獲ト云フ農夫其莖ヲ刈ニ藉刀或ハ  
鎌ヲ用ユ藉刀ハ鋼ニテ作ル大ナル刃ニノ形稍  
彎曲スル者ヲ木柄ノ末ニ附着スルモノナリ農  
夫ハ其柄ヲ兩手ニ持テ又ヲ右ヨリ左ヘ廻シ速  
カニ地上ヲ通過シ刈ル時ハ麦稈直ニ地上ニ倒  
レ次第ニ線條ヲナス之ヲ名ケテ齊列倒稈ト云  
フ又之ヲ小把ニ束タル者ヲ束稈ト云フ其鎌ニ  
一ノ木枝又ハ鐵把ヲ付タルヲ用ルアリ是其列  
ヲ正シ拾採シテ束稈トスルニ便ナルガ為ナリ

鎌ハ木ヲ滑ニ磨タル短柄ノ末ニ彎<sup>ミカツキ</sup>月形ナル鐵  
刃ヲ付テ其刃ヲ鋸齒ノ如クナス者ナリ農夫ハ  
右手ニ此具ヲ持テ左手ニ麦莖ヲ握リテ其稈ニ  
當テ自己ノ方ヘ引テ其莖ヲ刈ル之ヲ名ケテ麦  
ノ刈獲ト云フ  
麦穂ヲ束テ一小把トス名ケテ麦把ト云フ農夫  
ハ之ヲ小舎ニ運送スルカ或ハ麦把ヲ圃中ニ累  
積シ一ノ圓堂状ヲ作り藁ヲ以テ雨露ノ蔽遮ヲ  
ナス名ケテ穂團<sup>ホダマ</sup>ト云フ  
穂ヨリ穀粒ヲ離タンニハ連<sup>カラ</sup>耨<sup>サ</sup>ヲ用ヒテ其穂ヲ

學業操徑初編



打ッベシ此器ハ二本ノ堅材ヲ革ニテ結付タル  
モノニテ其一方ヲ以テ柄トス此動作ヲナスニ  
ハ農夫多ク力ヲ要ス又國ニヨリ麦穂ヲ打ッ  
ナク堅固ノ平地ニ其穂ヲ散布シ其上ヲ乘馬ニ  
テ輪廻シ其穀ヲ離ス<sub>テ</sub>アリ併シ打穂ハ甚辛勞  
ナル動作ナレバ農夫ヲ助<sub>ケ</sub>シ為別ノ器械ヲ以テ  
之ヲ施ス然ル時ハ廠舎ニ在テ其時限ヲ撰マズ  
此動作ヲ為シ得ベシ又穀ニ混セル藁屑雜穀砂  
石等ヲ分ツニハ揚骨外皮ヲ去タルニテ作タル  
大篩ノ内ニ入テ其穀ヲ振搖スベシ此事モ亦器

械ヲ用ルアリ然ル<sub>ル</sub>ハ其使用便ニメ且速ナリ

第十章 稻米

稻米ハ博物學ニ載ル如ク麦及ヒ甘蔗等ト同ク  
禾本科ニ屬スル植物ニメ世界人民ノ半數ハ此  
穀粒ヲ以テ糧食ノ基本トセリ之ヲ簡易ニ<sub>六</sub>ハ  
其穀ヲ唯水ト煮テ他ノ調味ナク僅ニ砂糖及ヒ  
塩ノ少許ヲ加ヘ食用トス是即チ印度人民及ヒ  
諸藩屬地ノ土人等常食トスル所ナリ  
稻米ノ本原ハ支那及印度ニシテ之ヲ亞細亞、亞  
弗利加、亞墨利加及ヒ歐羅巴南方ノ諸國西班牙、



伊太里等ノ諸州ニ於テ耕種スルナリ  
 稻米ハ好テ沼地或ハ濕潤ノ地又水ノ流通ヨキ  
 地ニ生ス其耕種スル地ヲ田ト云フ腐敗セル沼  
 地ナリ其臭氣ヲ發散スル故ニ此業ニ從事スル  
 モノ或ハ田ノ近傍ニ住スル人ハ屢危病ニ罹ル  
 一アリ  
 稻米ヲ耕スノ地ハ必ス平端ニノ方形トシ之ヲ  
 數區ニ分別ス其界ニ畔ヲ築テ溜水ノ便トス其  
 田ハ簡易ナル耕耘ヲナシテ播種ノ備トス播種  
 ハ其土地ニ從ヒ四月ヨリ六月ヲ候トス田ハ必

ス水ヲ充テ柔軟ナラシム種子ノ萌芽ヲ助ケル  
 為メ豫メ水ニ浸シ膨脹セシメ然ル後下種スベ  
 シ又碎土器ヲ用ヒガタキニ因リ下種ノ後ハ平  
 扁ナル板ヲ馬ニ牽カシム其萌生ノ後ハ屢水ヲ  
 灌キテ雜草ヲ去ル收穫ノ期ニ至レバ水ヲ去リ  
 テ乾燥ナラシム之ヲ行フハ尋常八月ノ末トス  
 成熟ヲ知ルハ其穂ノ黄色ヲ帶ヒ其莖ノ全ク蒙  
 トナルヲ以テ徵トス一ノ田地ニ於テ休耕セズ  
 又肥糞セズメ三四年間ハ收納スベシ  
 稻米モマタ連<sup>カラ</sup><sup>サ</sup>用ヒ或ハ馬蹄ニ踏マセメテ



之ヲ離ス然レモ粒ヲ分タテ能ハズ故ニ本白ニ  
入テ車ノカラ借リ穀粒ヲ分ルベシ米粒ヲ食用  
トスルニ其法多シ羹ニ用日菓子ニ製サズハ肉  
ト混和スル等用ル所多シ藥用トシテ緩和分効ア  
リ故ニ其病ニヨリ屢効驗アル者ナリ  
第十一章 玉蜀黍 土爾其麥  
玉蜀黍タウモロコシニ土爾其麥ト名ク然レ其根元ヲ搜索  
スルニ南亞墨利加ナリ米ト同ク禾本科ニ屬ス  
其莖強大ニテ長ク伸曲其穂ハ肥大多實也  
長圓形ヲナス此穀粒ハ大粒民益甚大也此穀

粒ヲ粉トシ麵包等ヲ作ルベク又嫩ナル全草ヲ  
以テ畜類ヲ養フ等ナリ且最モ能ク成熟スルモ  
ノニメ譬ハ一粒ヲ下種シテ五六百粒加之尚其  
餘ヲモ收穫スル者ナリ  
玉蜀黍ハ復時ノ植物ナレバ寒沍ノ氣候ヲ怯ル  
故ニ四月頃霜降ノ憂ナキ時ニ下種スヘシ工ナ  
ル農夫ハ冬月中ニ能ク其土地ヲ耕シ播種ノ備  
ヲナセリ玉蜀黍ノ莖稈ヨク成長スル時ハ六尺  
以上ニ達シ枝葉繁茂シ日光ヲ蔽遮スルニ至ル  
故ニ豫メ菜園中ニ其距離ヲ定ムベシ大約每畝



ノ間二尺許トシ三尺余ヲ隔テ一孔中ニ各三四  
個ノ種子ヲ蒔ベシ其地上ニ萌生スルヲ選ビ最  
モ長ズベキヲ残シ其他ヲ拔去ルベシ結實ノ穗  
ヲ收穫スルノ期ハ凡ソ播種シテヨリ五六個月  
ノ後トス實ノ熟スルニ至レハ農夫手ニテ採リ  
莖稈ヲ残シ置キ再ビ菜圃ノ耕作ヲ始ルノ期ニ  
至ル間ニ農夫ノ暇ニ任セテ刈獲スベシ收穫ノ  
後ハ結實ヲ曝乾スルヲ常トス或ハ竈火ノ熱氣  
ヲ借り乾スヲアリ又全草ヲ秣草トスルニハ菜  
圃中ニ種子ヲ散布シ稍開花ノ期ニ至リ莖稈ヲ

刈獲スベシ其穀粒ノ粉末ヲ以テ麵包ヲ製シ又  
菓予ヲモ作ル南方諸民ノ最必需ナル産物タリ  
又此穀粒ハ鳥獸ノ好テ食スル所ナリ其葉ハ藁  
團ヲ充ルノ用アリ又此草ハ他ノ植物ニ備ヘザ  
ルノ利益アリ人若シ一廻之ヲ耕作スレハ其地  
ヲ調和スルノ妙アリ故ニ結實シテ人ノ需用ヲ  
ナシ兼テ地ヲ休耕スルト同シ効アラシム  
第十二章 食根蔬菜 馬鈴薯  
馬鈴薯<sup>カタイモ</sup> 茶菜<sup>フクシサウ</sup> 胡蘿蔔<sup>ニンジン</sup> 蕪菁<sup>カブラ</sup> 菁<sup>アブラナ</sup>  
物ニ供スルノニシテ僅ニ庭園ニ作りシモ今



ハ之ヲ廣圃ニ耕シ家畜獸ノ良食トスルノミナ  
 ラズ兼テ其耕作スル土地ヲ改革スルノ効アリ  
 此種子ヲ蒔クニハ穀ヲ下種スルノ例ニ習ヒ散  
 布スベシ又畝ノ列ニ從ヒ蒔クトアリ或ハ列ニ  
 從ヒ植付ルモアリ如此植物ヲ名ケテ除草作物  
 ト稱スルハ他人作物ニ比スレバ甚屢雜草ヲ除  
 クコトヲ要スレバナリ故ニ能ク耕地ヲ調和シ  
 有害ノ雜草ヲ除ク時ハ後來作物ノ為メ豫メ地  
 性ヲ良クスル者ナリ  
 馬鈴薯ジャガイモハ元ト亞米利加産ニシテ紀元千五百年

間初テ歐洲ニ傳フ其性有益ナル植物ナリト雖  
 凡疑惑ノ説ニ依リテ久シク廢棄セラレシガ千  
 七百年代ニ至リ法國有名ノ農學者バルモンチ  
 エ氏ナル者自己ノ著述ニ其事業ヲ以テ其虛  
 説ヲ辨論シ最貴重ノ植物ナルヲ説示セラレタ  
 リ此薯ハ何レノ土地ヲ撰バズ生長スト雖凡多  
 クハ乾燥セル輕キ地ノ肥糞ニ富ザルヲ好ム且  
 ツ其地ハ深ク耕スヲ最良トス  
 之ヲ廣ク植ルノ期ハ春月稍地中ニ温氣ヲ生ス  
 ル時ニ行フベシ



之ヲ植ルトキ根塊ノ大ニ過ル者ハ之ヲ切り悉ク中等ノ形トナシ手ヲ以テ畝ノ凹處ニ植ニ其距離ヲ一樣ニ定メ犁車ノ畝ヲ通過スルニ從ヒ之ニ土ヲ掩ハシム植ルノ後ハ碎土器ノ動作ヲ用ヒ初テ樹藝ノ事業終ル莖葉ノ萌出セシ後ハ絶ヘズ雜草ヲ除去シ土ヲ其根際ニ累積シテ根ヲ掩フベシ收納ノ期ハ夏末ヨリ初メ秋月中ヲ以テス此薯ハ人生ニ於テ大ナル糧トナリテ其味極テ爽快ナリ尚此ノ貴重ナル植物ノ耕作ハ牛、牝牛、羊、山羊、等ノ家畜獸ヲ養フニ至テ其効少

カラズ

第十三章

茶菜

胡蘿蔔

蕪菁

茶菜ハ其根大ニシテ甘味ノ香氣アリ種子ヲ春中ニ播キ秋中其根肥満スル時ニ至リテ採取ルベシ其根ヲ洗浣シテ氷霜ニ觸レザル乾燥ノ場所ニ貯スベシ冬月間家畜類ノ食糧トシテ甚佳ナリ葉モ亦家畜ヲ養フニ供スレ生鮮ナルヲ用ユベシ又其收納ノ後ニ葉ヲ地中ニ埋ムルトキハ肥糞トナルナリ胡蘿蔔モ亦冬月ノ蔬菜ニシテ殊ニ家畜ノ食糧



ニ宜シ故ニ馬、牛、羊、家禽類ニ其量ヲ定メ與フル  
 トキハ甚々健康ナラシムル者ナリ其根ヲ寒氣  
 ナラザル前ニ採採スルニハ其種ヲ春季ニ下ス  
 ベシ  
 廣ク耕作スル所ノ大蕪菁ハ即チチルニッブナリ  
 之ヲ冬月貯置ク爲メ採取ルヲアリ又ハ直ニ其  
 場ニ置テ家畜ニ食セシム  
 法國中ノ諸州ニ於テ椰菜ハボタンヲ廣ク作ルト他ノ蔬  
 菜ノ如ク其産出亦甚々多シ三月ニ播種シテ五六  
 月ニ至リ植替ユベシ其後全形三今ノ二程ニ成

長セシ時ニ至リテ其葉ヲ摘採ルベシ  
 瑞典蕪菁ナル物ハ蘇鐵菜和名ノ種類ニメ成長ス  
 ルト早ク且寒氣ノ極ニ至ルモ怯ルトナシ  
 小蚕豆義譯ナル者ハ專ラ馬ノ食糧トシテ耕作ス  
 ルモノナリ  
 菊薯キクイモ和名ハ馬鈴薯ノ如ク亞米利加ヨリ傳ヘシ向  
 日葵マフリノ種類ニメ其花美麗ナル草ナリ其塊根ハ  
 馬鈴薯ノ如ク人生ノ食ニ供ス然レ平常ハ獸類  
 ノ食糧トス其葉ト新苗ハ良善ナル牧草ナリ其  
 葉ヲ採收スルニハ復月ノ末成長セル時ヲ良ト



ス先ツ塊根ヲ得ル爲ニハ秋月ニ堀取ルベシ又  
 氷霜ヲ稍厭フト雖凡冬月其修置キ他ノ諸菜ノ  
 尽クル頃之ヲ收採スベシ  
 小豌豆譯義一名ビザイユ及ビ羽扇豆和名狼蚕  
 豆譯義ノ如キ畜食ハ大耕耘スル者ニメ常ニ雜草  
 ノ除去ヲ要スル植物ナリ  
 第十四章 畜食草菜 天然草野  
 莖葉共ニ畜類ヲ滋養スベキ植物ヲ名ケテ畜食  
 草菜ト云フ  
 地上ニ生長繁茂セルヲ刈採テ秣草トスベキ草

ノ生ズル地ヲ名テ草野ト云フ  
 野生セル草ヲ刈採セズメ其地ニ畜類ヲ放テ養  
 フ所ヲ名ケテ牧場ト云フ  
 最良キ草ヲ生シ牛ノ牝牡ヲ養フベキ野ヲ名ケ  
 テ畜養牧野ト云フ此ノ如キ牧野ノ有名ナルハ  
 アウヂ州中其他カルバトス、コタニタニ、マンシユ  
 等諸州ノ各地ニ多シヲトベルギウ、ジラ、ポー、ジ  
 アルノ諸山ニ於ル牧場ハ多ク搾乳牝牛ヲ養フ  
 其疲瘠ナル牧場ハ羊類ヲ養フニ用ユ  
 草野ヲ分チ天然草野、人造草野ノ二種トス



天然草野ナルハ自然ノ倣ナル者ニメ雜草モ相  
交リ生ス其產生スルヲ刈取り乾カシタル草ヲ  
名ケテ枯草ト云フ高キ乾燥ノ草野ヲ名ケテ高  
燥草野ト云フ其地ニ生スル枯草ヲ良品トスレ  
トモ其收穫ノ量ハ却テ多カラザル者ナリ殊ニ  
濕潤ナル年或ハ寒キ地ハ右ノ如キ地ニ雖モ更  
ニ其効ナシ其草野若シ濕地ナレバ其生スルコ  
多シト雖モ其品類ハ却テ劣ル者ナリ草野ノ最  
良ナルハ谿間又ハ差高キ平地ニシテ其傍ニ流  
水アリテ適宜ニ清涼ナル氣ヲ與フルニアリ

天然草野ニ注意スベキ件ハ惡草ヲ除去シテ其  
草ヲ成長セシム又乾枯スル時ハ之ニ水ヲ與ヘ  
水濕ニ過ル時ハ之ヲ減ズルニアリ草野ヲ刈獲  
スルニハ藨刀ヲ用ユ故ニ地面上ニ高低ナカラ  
シムベシシ鼯鼠ノ地下ヨリ墳起セル土塊ハ務テ  
之ヲ破碎スルコトニ注意スベシ又苔蘚ノ生シテ  
其草ニ害ヲ加フルヲ除去スベシ  
草野中ニ有害ノ雜草ヲ多ク生シテ除去スベカ  
ラザルニ至ル時ハ開墾シテ暫ク間耕耘ヲ行ヒ  
良キ野草ノ種子ヲ下スベシ



第十五章 人造草野 刈草ノ業

人ノ耕作セル野ヲ人造草野ト云フ即チ一ノ圃  
 園ニシテ之ヲ秣草ヲ播種シ多少時限ノ後成長  
 スレバ之ヲ芟去リ又他ノ作物ヲ播種ス人造草  
 野ニ施スベキ植物ハ地味ニ從テ異ナリト雖モ  
 凡ソ零陵香、紅荳草、首蓿等ノ如キハ秣草トメ佳  
 ナル者ナリリセルニ其種子ハ春時直ニ地ニ蒔クヲアリ  
 又ハ大麥、雀麥等ヲ蒔キシ後ニ其間ニ播種スル  
 時ハ大麥、雀麥等ノ成長スルニ從ヒ適宜ニ日光  
 ヲ掩ヒ成長セシメテ良キ秣草トナス又秣草ヲ

下種スルニ秋中麥又ハ裸麥ト同時ニ播種スル  
 コトアリリ零陵香ナル者ハ宿根セル草ニメ多ク  
 繁茂ス且ソ沃地ヲ深ク耕シ十分培養セルヲ良  
 トス濕地ハ甚々宜シカラズ此草一年間ニ刈獲  
 ルト凡三四度ニシテ繁盛スルト四年ヨリ十二  
 年ニ至ル紅荳草ナル者モ亦最良ナル秣草ニメ  
 長ク乾燥スト雖モ怯ルトナシ殊ニ深ク耕タル  
 石地ニ適當ス然トモ濕氣ハ甚々忌ムモノナリ  
 其繁盛ノ間ハヤ、零陵香ヨリ短シ收穫モ一年  
 間ニ一度ヲ常トス或ハ二度施ストモアリ



首蒼ハ常ニ穀草或ハ亞麻、油菜等ノ間へ播種ス  
此草亦紅莖草、零陵香ノ如ク同地ニ生スルヲ六  
七年間ナリ  
如此植物ヲ耕作セシ地ヲ開墾シテ之ニ穀類ヲ  
播種スレバ其成熟ニ當リ必ス効アルモノナリ  
莠草ノ業ト名クル者ハ唯其草ヲ時期ニ應ジテ  
刈收スルヲ云フ而已ナラズ兼テ野草ヲ枯草  
トスルノ動作モ亦其中ニ含有セリ草野ヲ刈ル  
ノ時ハ先ツ野草開花ノ期ヲ以テス第一ノ刈獲  
ハ五六月ト定ム其後ハ雨降ニ逢ヒ再ヒ萌生ス

ルヲ刈採ル之ヲ名ケテ再刈ト云フ刈終リシ後  
ハ其草ヲ曝乾シ三脚杖ヲ以テ之ヲ轉覆シ乾燥  
セシメ束子テ大把トシ若干日間累積シテ尚水  
分ヲ去リ然後ニ其量ヲ定メテ結束スベシ

第十六章 替作 休耕

同地ニ耕作スル穀菜ノ種類ヲ屢換ル時ハ頗ル  
地ニ益アリト云ヘリ實ニ毎々充分ノ收納ヲ得  
ント欲セバ必ス同地上ニ同種類ノ植物ヲ屢々  
播種スベカラズ譬ハ麥其他ノ穀類ノ如キヲ年  
々同所ニ播種スル時ハ縱令膏腴ノ地ト雖モ若



千年間ニハ自然疲瘠ノ地トナルニ至ルベシ又  
 豌豆、苜蓿、亞麻、油菜、馬鈴薯ノ如キモ多少ノ日月  
 ヲ經テ後以前ノ地ニ播種スル時ハ大ニ益アリ  
 トス故ニ作物ハ必ス年々交換スベキモノトス  
 又同地ニ作ル各種ノ植物ハ毎年順序ヲ立テ替  
 ヘザルヲ得ズ此方法ヲ名ケテ替作ト云フ此ノ  
 順序ヲ正クシ常ニ播種スル法尤モ如シ譬ハ初  
 年ハ小麥、裸麥ニメ次年ハ雀麥、大麥トシ三年ハ  
 苜蓿、馬鈴薯等ノ如キヲ替ヘ作ルベシ此法ヲ名  
 ケテ三年替ト云フ其故ハ同圃ニ同シ物ヲ作ル

一必ス三年ニ一度ナレバナリ  
 或ハ國ニヨリ一度耕作セシ後ハ其地ヲ休マシ  
 ム名ケテ休耕ト云フ是即一年間地ヲ耕作セザ  
 ルナリ又國ニヨリ初二年間ハ耕作ヲナスト雖  
 凡三年目ニ至リテハ更ニ耕作セズ此ノ如キ方  
 法ハ猶三年替作ニ同シ又一ノ圃アリテ其半ハ  
 穀類ヲ播種シ其半ヲ無作ノ地トス是即テ二年  
 替作ナリ如此方法ハ畜類少クシテ肥糞ニ不足  
 スルノ土地ニ施行スルヲ最モ要用ナリ然レモ  
 一般ニ論スレバ休耕ハ不用ニ属スル者トス是



相當ノ注意ヲ用ヒテ生長スベキ種子ヲ施ス時  
ハ必ス生産ノ効アルモノナレバナリ  
上ニ論スル如キが故ニ一日モ土地ヲ無産ト成  
シテ放棄スルヲ勿レ先ヅ播種ヲ交換ノ行ベシ  
殊ニ穀類ノ如キハ土地ヲ疲瘠セシムル者ナレ  
バ之ニ亜クニ牧草ヲ以テ洗饒ナル後ハ食根  
類、豆類ノ如キ蔬菜ヲ作ルベシ此等ハ雜草ノ除  
去ヲ好ム者ナレバ屢除去スルニ從ヒ其地ヲ調  
和スルニ至ル者ナリ  
此法ヲ名ケテ巡回替作又ハ交換替作ト云フ尤

其施行ハ地質ト季候ト國ノ需用ニ從ヒテ適宜  
ニ用フベシ  
第十七章 樹園 樹林  
樹園及ヒ樹林トモ播種又ハ植苗等ニヨリテ成  
ル播種ハ樹園トスベキ地ノ表面へ直ニ種ヲ下  
スモノトシメ其入費モ植苗ヨリ少シ因テ其地ノ  
適否ヲ探ビ能ク耕耘ノ種子ヲ下スベシ庇蔽ナ  
キ廣地ニ蒔ク時ハ其嫩苗ヲシテ直ニ強キ日光  
及冬月ノ寒風ニ觸レガラシムルノ備アルベシ  
即白楊、樺木ノ如ク成長ノ速ナル白材ノ苗ヲ其



地ニ種植シテ其害ヲ防クベシ或ハ林園ノ樹ヲ  
播種スル時穀類ノ種子ヲ混交シ而後其莖ノ成  
長スルニ至リ其全莖ノ半ハヲ刈截セバ適宜ニ  
苗ヲ庇蔽スルニ足ルベシ  
樹園及ビ樹林ヲ作ルニハ播種スルヨリ植苗ス  
ルヲ利益多シトス且其成長モ速ナリ養樹園ニ  
生育セシ嫩樹ハ強壯ニメ其根蔓延スレバ植替  
ルトモ必ス害ナキ者ナレバ樹林ハ植ル爲ニ撰  
用スベキ者ナリ此嫩樹ヲ植ルベキ地ハ幅各三  
尺余ノ畝ヲ作り中央ニ植ユベシ每畝ノ間ニハ

其幅ノ同キ空地ヲ置キ其樹ヲ植シ後二年間ハ  
必ス春季ニ一回夏季ニ一回ヅハ両度ノ手入ア  
ルベシ是雜草ノ多ク生ジテ地ヲ乾カシムルノ  
害ヲ避ケ又植タル嫩樹ノ生育セザルアレバ必  
ズ他ノ苗ヲ植替ルルニ注意スベキ爲ナリ又地  
ヲ疲瘠セシムル雜草殊ニ荊棘ヲ拔去リテ植シ  
樹ノ妨害ヲ防ク其樹成長シテ遂ニ樹園樹林ト  
ナレバ其樹ノ實自ラ落チ萌生シテ林樹ヲ永續  
スルモノナリ  
第十八章 林樹ノ上山 榎 山毛榉 榆樹等



林樹中ノ最ナル者ハ榲<sup>カシ</sup>山毛榲<sup>マツ</sup>榆<sup>カシ</sup>ソロノキ、秦皮<sup>トチリ</sup>、  
槭<sup>カ</sup>樹<sup>デ</sup>合歡<sup>ア</sup>、栗<sup>シ</sup>等ニシテ皆乾燥ノ地ヲ好ム林樹ノ  
中其用多ク貴重スベキ者ハ榲ナリ之ヲ用ヒテ  
薪材トシ又家屋、船艦及ヒ諸術用器ヲ製造ス其  
皮ハ細粉トシ革ヲ鞣スノ効アリ榲類ハ橡<sup>ド</sup>栗<sup>シ</sup>ト  
名クル實ヲ結フ之ヲ播種シテ増殖セシメ又豚  
家禽ヲ養フベシ浮水樹ハ常緑榲ノ一種ニメ其  
皮ヲ壘塞トスベシ名ケテ厚<sup>コ</sup>浮<sup>ル</sup>皮<sup>ク</sup>ト云フ  
山毛榲モ亦榲ノ如ク林樹トシ佳ナル者ナリ播  
種シテ之ヲ増殖ス其材ハ工業ニ用ル小器ヲ作

ル又薪材トスベシ其菓實ヲ名ケテ風栗<sup>フ</sup>ト云フ  
油ヲ搾リ食用トス又燈油トシテ甚佳ナリ  
榲ハ用材中ノ最良品トス又別ニ屈節榲<sup>義</sup>ト名  
ルアリ其質堅ク彈カアル故ニ車工ノ用ニ供ス  
ソロノキハ白材ニメ堅ク木理緻密ナリ故ニ車  
工中ノ最モカヲ要スル所ニ用ユ然ルモ十分乾枯  
セザレバ用ベカラス是濕氣ヲ去バ其容量大ニ  
減縮スル故ナリ又薪材ニ佳ナルモノトス  
秦皮ハ樹林中ノ大樹ニメ木質稍堅ク甚々彈力  
アリ擔<sup>ニ</sup>棒<sup>ホ</sup>、車輻、農器又牽<sup>ロ</sup>鑽<sup>サ</sup>器<sup>イ</sup>ニ用ユ



槭樹ハ野槭ト稱シ人ノ知ル所ナリ其樹甚々繁  
 茂セル葉アリテ木質堅實ナレバ之ヲ十分ニ磨  
 キテ美良ノ材トナス  
 合歡ハ即擬合歡ニ最要用ナル美材トナリ  
 其材ハ指物師ノ職業ニ供ス  
 栗ハ大樹トナリ其材ノ品位最佳ナル者ニ其  
 菓實ハ食料トスベキニ大ニ人ニ益アリ  
 第十九章 林樹ノ下ニ米國楓樹、白楊樹等  
 濕地ニ適スル林樹ハ即米國楓樹、白楊樹、楊柳及  
 赤楊ノ類是ナリ米國楓樹ハ原來北亞墨利加

ノ産ニシテ歐洲ニ傳ハリシハ千六百四十年代  
 ナリ枝葉最モ盛大ニ好デ水邊或ハ河傍ニ生  
 殖ス其材質ノ木理緻密ニ工業上ニ用ヒテ山  
 毛櫟ト同効ナリ  
 白楊樹ノ中最モ上等ナル者ハ荷蘭種白楊、瑞西  
 種白楊、佛國種白楊即尖塔形白楊等ニシテ成長  
 甚々早ク忽チ喬木トナル此樹ノ材質白色輕滑  
 ニシテ堅實ナラス指物師ハ家具ヲ作ルニ此材  
 ヲ用ヒ其表面ニ紅木ヲ附着ス其他指物師ニ於  
 テ各種ノ用アリ又麵包ヲ焼ク竈ノ薪材トメ良



ナリ  
水揚ハ湿地ナル草野ノ水邊ニ生ス常ニ此樹ノ  
幹ヲ成長セシメズ其頂ヲ截リ許多ノ枝ヲ  
出サシメ三四年毎ニ之ヲ切取テ細條トシ或ハ  
之ヲ組織シ又薪材ヲ容ル籠ヲ作ル揚柳ノ種  
類甚々多シ其内杞柳ト名クル者ハ農家ニ要用  
ナル者ニメ平常不可缺ノ家具ヲ作レリ毎年切  
タル枝ヲ以テ葡萄蔓ヲ結ビ又樽ノ籠トシ副木  
ヲ結ビ組織ヲナシ又籠類ヲ作り其他尚百工ニ  
用アリ

赤揚ハ歐洲ニ於テ沼池ヲ好ム樹ノ一ニメ白揚  
揚柳等モ成長ス可ラザルノ湿地ニ成長ス其材  
ハ薪トシ木竿及ヒ葡萄ノ副木等トス  
諸樹ノ内脂質ヲ備タル者アリテ脂油ト稱スル  
一種ノ燻燃物ヲ出セリ此質ハ樹節ヲ切ルルハ  
其口ヨリ流出ス之ヲ取テ瀝青、吧嗎油ヲ作ル  
脂質アル樹ニメ久ク損敗セザル者ハ即栢類ナ  
リ又落葉松ハ造管ニ必用ナリ野松一名北地松  
ト云フ樹ノ材ハ船艦ヲ製スルノ用ニ供ス  
海邊松ハ松毬ト名クル所ノ實ヲ薪ニ用テ此樹



ハ海邊ニ能ク成長スレバ潮水ノ防禦ニ最適當  
スルモノナリハ  
第二十章 開墾之業 水ヲ除ク事  
開墾ナル者ハ耕作スベキ地トナス目的ニシテ  
殊ニ雜草木及ヒ石等ノ多キ地ヲ開テ草野或ハ  
諸穀ヲ耕スニ適セシムヲ云フ又林地或ハ荒蕪  
廢棄ノ地ヲ開クモ亦此業中ニ在リ  
又水ヲ除クハ土地ノ大ニ水害ヲ被ルヲ避ケ  
シメ耕作ニ適セシムル業ヲ云フ  
谿間ニアル膏腴ノ林地ハ犁車或ハ鋤ヲ以テ開

墾シテ利益アリ然レモ山多キ國ニ於テ斜傾セ  
ル山地ニ施セバ成効ヲ得ズ却テ害ヲ招クニ至  
ル是樹木叢生スル片ハ其繁茂セル枝葉ト蔓延  
セル根ニ因テ土地ヲ保護スト雖モ之ヲ開墾ス  
ル片ハ雨水地ニ滲入スルノ暇ナク其表面ヲ流  
レ耕作土ヲ誘ヒ去リ又山丘ノ側岸ヲ崩頽ニ終  
ニ河流ヲナシテ谿間ニ擴溢シ大ナル損害ヲ釀  
成スル者ナリ  
不毛地、荒蕪地、其他荒廢ノ地ヲ開墾セニハ先  
ツ地上ニ生マル所ノ雜草木ヲ燒棄テ後ニ犁車



ニテ耕耘シ調和スベシ  
又岩石多ク地ハ鑿斧ツルハシ或ハ木槌ヲ用テ之ヲ取除クベシ其石或ハ巨大ナレバ之ヲ火藥ニテ破碎スベシ荒蕪地又粘土地ナレバ先ヅ農具ヲ地ノ表面ヲ切片トシ乾燥シテ後ソノ表面ニ雜草木ノ着タル方ヲ内部ヘ向ケ累積シテ竈形トシシ又其内部ヘハ雜木ヲ投シ之ニ火ヲ放シトキハ其雜草木ハ皆燒ケテ土壤ハ多ク炭氣ヲ含ム竈形ニ積タル土塊ハ自然ニ破碎スベシ然ル後之ヲ取テ地上ニ散敷スルナリ

水ヲ除ク方法ハ一時或ハ從來浸流スルノ水害ヲ避ケシムルナリ園圃ヲ乾シ清潔ナラシムルニハ渠ヲ穿テ剩餘ノ水ヲ溜メ或ハ石ニテ渠ヲ設ケ土ヲ蔽フベシ又ハ渠底ニ瓦管ヲ埋メ水ヲ流通セシムルノ法アリ名ケテ水抜法ト云フ  
第廿一章 菓樹嫁接樹之業  
菓樹ハ養樹園ニ育フ嫩樹ヲ選出メ植ルアリ又其莖ハ樹ヲ核實及子仁ヲ播種スルアリ然レモ播種セル樹ハ實生ミシヤウ名俗ナルバ良菓ヲ結ブトナシ故ニ必ス之ニ良菓ノ枝條ヲ接樹スベシ



接頭ツギホト云ハ植物ノ生活セル一部分ニシテ之ヲ  
砧樹ダイギト云フ他ノ植物ニ接着セシメテ一樹トシ  
其然ニ成長スル如クナラシム  
此法ヲ脩ル要件ハ其接頭ツギホト砧樹ダイギト同一ノ種類  
ナルカ或ハ稍異ル種類ナルベシ  
菓樹ヲ接ニ各種ノ方法アリ平常用ル所ハ劈接ワッソギ  
壓接ヨヒソギ節接ノヅギト三ナリ又ハ  
劈接ワッソギハ先ツ二三節アリテ菓ヲ結ベキ良キ枝ヲ  
取り其下部ヲ小刀コバニテ削リテ接頭ツギホトス又別ニ  
砧樹ダイギヲ横截シ小刀コバニテ其截面ヲ平ニ削リテ後

縦タテニ割リテ之ニ小木片ヲ挿シ暫時間ノ後チ前  
ニ備ヘタル接頭ヲ取り接頭ノ皮ト砧樹ノ皮ト  
接着スベキ様ニ挿ムベシ接テ後ハ其接所ヲ大  
氣ニ觸レザル爲メ脂膏或ハ粘土ヲ附着シ布片  
ヲ以テ其上ヲ巻掩フベシ  
壓接ヨヒソギハ春季ニ砧樹ト接頭トヲ近ヅク木理ニ從  
ヒ両樹ヲ削リ其木心ニ至リテ止リ其皮互ニ感  
接セシムル爲メ其接所ヲ巻掩フベシ  
節接ノヅギハ實ヲ多ク結フ樹ヲ選シ其接頭トスベキ  
枝ニアル節ノ内ニ於テ兵器ノ紋ニ似タル瘤ア



ル節ヲ削リ取ルベシ茲ニ於テ其砧樹ノ皮ヲ丁  
 字形ニ切り其両方ノ皮ヲ中心ヨリ離シ其間ニ  
 接頭ヨリ取タル節ヲ挿シ羊毛糸ニテ巻掩フベ  
 シ兵器ノ紋トハ其紋ニ威勢  
 總テ接樹法ハ成功スルニ及ビ其皮互ニ固着シ  
 テ其節芽成長ス其時砧樹ニ生スルノ枝葉ヲ除  
 去スベシ然ル片ハ此樹ニ結ブ菓實必ス接頭ニ  
 用ル樹ニ結ブ物ト同一ナルヲ疑ナシ  
 第廿二章 高榦菓樹並軟榦菓樹  
 菓樹ハ他樹ト共ニ廣園ノ中ニ植ルアリ或ハ菓

園ニ植ルアリ或ハ蔬菜ト菓樹トヲ交ヘ植ル爲  
 メ作タル園ニ植ルヲアリ  
 菓樹ヲ分ツテ自立即高榦菓樹及ビ副木ソノギヲ要ス  
 ル軟榦菓樹トス  
 高榦菓樹ハ植テ後ハ自然ニ任メ成長セシメテ  
 他ノ助ヲ要スルヲナシ然レモ其樹下ニ生スル  
 雜草ヲ去リ枯枝ヲ切除キ皮上ニ生スル苔ヲ取  
 去リ毛蠟ケムシ、蝸牛カタツムリ其他ノ蟲ヲ除キ有害ノ鳥獸ヲ避  
 ルヲ等ニ注意スベシ  
 軟榦菓樹ハ組タル木枝ヲ以テ墻壁ヘ保タセ之



ニ其樹枝ヲ<sup>サ</sup>藺又楊枝<sup>ヤナギノエダ</sup>ニテ結附ク此動作ヲ名ケ  
 テ貼壁法ト云フ其副木ヲ要スル軟翰菓樹ハ桃  
 杏、梨、葡萄等ニメ右ノ動作ヲ施セバ殘霜、霰、雹等  
 ノ患害少ク常ニ良キ季候ニ遇シ夫ニ生ズル  
 菓ハ肥大ニメ早ク成熟シ不熟ノ物ヲ生スル  
 ナシ又其數モ毎年差等アルヲ稀ナリ之ヲ他ノ  
 自然ニ任スル樹ト比較スルニ其益甚ク多シ故  
 ニ如此保護ヲ與ルヲ良全ノ策トセリ  
 樹枝ヲ切込ノ事業ハ十分懇切ナル工夫<sup>シユケン</sup>ヲ盡ス  
 ニ非レバ其効少シ故ニ此業ハ容易ナラザルノ

事ニメ缺クベカラザルノ要件トス  
 今茲ニ各種菓實ノ貴重ナル部ニ從ヒ之ヲ分ツ  
 外面ノ堅キ菓ハ栗<sup>クリ</sup>、胡桃<sup>クルミ</sup>、巴且杏<sup>アマミデ</sup>ナリ名ケテ乾菓  
 ト云フ核ヲ含有スル菓ハ桃<sup>モモ</sup>、杏<sup>アンズ</sup>、櫻桃<sup>サクランボ</sup>等ナリ名  
 ケテ核菓ト云フ子仁アル菓ハ苹菓<sup>オホウゴン</sup>、梨<sup>リンゴ</sup>、楡<sup>マルメロ</sup>、棗<sup>ナシ</sup>ナリ  
 名ケテ仁菓ト云フ又前ニ舉ル各類ニ屬セザル  
 菓アリ無花菓<sup>イチジク</sup>、葡萄<sup>ブドウ</sup>、酸栗<sup>スダリ</sup>、和樹莓<sup>キイチゴ</sup>、草莓<sup>クサイチゴ</sup>等ナリ  
 菓實中全ク熟セザレバ採收スベカラザルアリ  
 其他核菓、仁菓等ノ如キハ成熟ノ三四日前ニ採  
 收スルモノナリ



菓實中木竿ボウニテ打落シ害ナキモノハ唯胡桃ト  
栗ナリレ苹菓梨等ハシイドルポアブレ等ノ酒ヲ  
造ル食用ニ供スル諸菓ヲ採ルニ最良法ハ手指  
ニチ一菓毎ニ取ルベシ又冬月ノ用ニ供スベキ  
菓實ハ寒氣ノ侵サバル乾燥ナル場所ニ苔ヲ以  
テ包ミ貯ヘ置ベシ但シ苔ハ乾タルヲ  
用ユルナリ

第廿三章 蔬菜

穀物ノ外食用ニ供スル草ヲ名ケテ蔬菜ト云フ  
此蔬菜ヲ作ル地又園ヲ名ケテ菜園ト云フ土地  
ノ性ニ從テ其稱呼同シカラズ若ハ之ヲ乾シタ

ル沼地ニ設ル片ハ名ヅケテ低圃ト云フ菜圃ヲ  
設ニ要用ナル事業ハ南又東向ニシテ灌水ノ便  
利ヨキ地ヲ適當トス且其地ハ深ク耕シテ適宜  
ニ調和スベシ耕作ヲ施スニ當リテハ其地ヲ井  
字形ニ區分シ之ヲ平等ニ別ツ縦線ニハ長短ア  
レモ必ス其幅ヲ狭クシ播種雜草除去耕耘灌水  
等ヲ容易ニ成シ得ベキ距離アラシム洋芹苗芹  
セルホーイ  
草萐等ノ如キ草ヲ以テ各圃ノ周圍トスベシ若  
シ其周圍ヲ別ニ作ル片ハ右等ノ播種ハ外部ニ  
施シ周圍ニハ短小ナル菓樹ヲ作ルベシ尤モ空



氣ノ流通光線ノ配達等ノ為メ其距離及ビ高低  
 等ヲ吟味シテ其中ノ蔬菜ニ害ナカラシムベシ  
 蔬菜ノ種類最モ多クメ其質ハ各異ナリ其根及  
 ビ地中ニ在ル部分ヲ食スル者ヲ舉レバ馬鈴薯  
 胡蘿蔔、蕪菁、波羅門參、葱等ナリ其花ヲ食スル  
 者ハ朝鮮菊、花椰菜ナリ其菓實ヲ食スル者ハ  
 ハ草苺、甜瓜、胡瓜、蕃茄ナリ其穀粒ヲ食スル者ハ  
 蠶豆、菜豆、小扁豆、豌豆等ナリ其他新芽及葉ヲ食  
 スル者ハ天冬芽、菠薐菜、苦苣、蒿苣、カルドンナリ  
 植物ノ中香辛ニ供スル者ハ洋芥、苗芥、芥、菊、羅勒

菜沃蘭、刺賢、堉、兜等ナリ  
 總テ菜園中ニ作ル所ノ植物ハ常ニ保護ヲ加ヘ  
 ンテ要ス土地ハ十分淨潔ニシ耜耜ニヨリテ  
 能ク調和セシメ且ツ肥糞及ビ腐壤等ヲ用ヒテ  
 膏腴ニスベシ  
 菜園ノ植物ヲメ霜、沍ノ憂ナカラシムルニハ藁  
 ヲ以テ蔽フベシ且成熟ヲ能センニハ硝子張拵  
 及ビ玻璃鐘ヲ蔽フベシ  
 播種ノ業ハ前ニ作タル植物ノ盡ル頃ハ次ノ植  
 物ノ成長シテ順次ニ食用トナルベキ様ニ施ス



ベキモノナリ取次後用...  
 第廿四章 他種蔬菜...  
 蔬菜中他ニ異タル注意ヲ施スベキ者アリ即チ  
 天冬<sup>マツバウド</sup>芽ナル者ハ菜園中ノ佳品ト稱スベシ其實  
 赤色ナル小圓子ニメ内ニ種子アリ根ニハ鬚  
 根ト稱スル多ノ條根アリ天冬芽ヲ作ニハ先ツ  
 其種子ヲ地ニ蒔クト雖モ又屢他法ヲ用ルアリ  
 先ツニケ年モ歷タル者ノ根ヲ取テ一尺六寸余  
 ノ深ヲ作りテ列子植ベシ其地ハ乾燥滋養メ十  
 分調和シタルヲ良トス<sup>レ</sup>深ノ底ニ肥糞ヲ敷キ其

上ニ良キ土ヲ置キ而メ其鬚根ヲ適宜ノ距離ニ  
 植ルノ後再ヒ其萌芽ヲ土ニテ蔽フ其植ル期ハ  
 秋春ニ行フベシ植テ後三ケ年間ハ毎年其地ヲ  
 再耕シ雜草ヲ去リ上等ノ肥糞又腐壤ヲ交ヘタ  
 ル土ヲ與フベシ<sup>レ</sup>第四年ニ至テ食用ニ供スル爲  
 ノ少ク其萌芽ヲ取り得ベシ第五年ニ至リテハ  
 全ク十分ナル天冬芽ヲ生ズルニ至ルベシ若シ  
 農夫巧ニ保護ヲ加フル片ハ能ク萌生スル<sup>レ</sup>十  
 二年ヨリ十五年ニ至ルベク又ハ二十年ニモ至  
 ベシ<sup>レ</sup>此品ハ我邦ウドヲ作ル法ト大抵同ジク又  
 其食法モ同ジクナリ



朝鮮薊テウロシアガミ名和ハ大ニ「シヤルドン」ニ似タル者ナリ之ヲ耕作スルノ法次第ニ開ケ當今ニ至リテハ其種類ノ數益多ク其品位善良ニシテ最淡泊ナル食用品トス其食用ニ供スルノ部ハ未タ開カザルノ花蕾ナリ此朝鮮薊ハ播種ノ法ヲ用ルハ甚タ稀ナリ之ヲ繁殖セシムルノ法ハ既ニ實ヲ結タル者ノ根際ニアル小根ヲ根傍ヨリ割切シ四月中ニ沃饒ナル地ニ植ベシ其植タル者へ多ク水ヲ與フル片ハ其秋ヨリ花ヲ生スベシ然ドモ三年ノ後ニ至リ枯ル、モノナリ

カルドニナル者ハ朝鮮薊ノ變種ニメ大ナル葉ヲ萌生ス其葉ノ多肉ナル部ヲ取り煮テ食用トスベシ  
萬苣チサキク苦苣チサノ如キ蔬菜ハ之ヲ播種シ其苗ヲ菜圃中ニ植ルナリ其葉ヲ採ルノ前ニ當テハ諸葉ヲ一束トメ藁ニテ結ブベシ然ル片ハ太氣、光線、水等ニ觸レズ故ニ成長ハ止ムト雖モ其色ハ晒白トナリテ食用ニ宜シ

第廿五章 葡萄樹ブドウハ蔓生灌木ニメ其花ハ總狀フサヲナシ天稠



密ナリ其菓ヲ名ケテ葡萄ト云ヒ其榦ヲ名ケテ葡萄榦ト云フ其榦ヨリ生ノ長ク曲屈スベキ枝ヲ名ケテ葡萄蔓ト云フ

此樹ヲ養フニハ輕乾ノ地ヲ以テ適當トス今茲ニ葡萄樹ヲ植ル一般ノ法ヲ次ニ示サン先ヅ土地ヲ能ク耕ヘシ調和セシ後ニ一尺餘ノ深サニ穿チテ其孔ニ挿シ又ハ長形ノ畝ニ並ヘ挿スベシ其挿枝ハ今年萌出シテ十分成長セル蔓ヲ舊蔓ノ一節ヲ附ケ切取ル者ニメ之ヲ名ケテ節フシツキ附ノ挿枝ト云フナリ

植附シ後ニ三年間ハ常ニ注意スベシ故ニ其初年ニハ地ヲ荒蕪セザル爲メ雜草ヲ除キ再耕ヲ施スベシ其後ハ本榦トナルベキ榦ノ外ナル萌芽ヲ切去ルベシ而メ春月ニ至リ其本榦ノ強弱ニ從ヒ一二節上ヨリ切去ルモノトス葡萄樹ヲ切ル方法ハ他ノ菓樹ヨリ容易ナリ其故ハ此樹ノ菓ハ其年ニ生シタル等ニ生ズル者ナレバ其切斷スル所ヨリ下部ニ在ル節ニ必ス實ヲ結ブト知ルベシ故ニ其年ニ至レバ鋤ニテ第三耕ヲ輕ク行ハベシ



又注意スベキノ件ハ實ヲ結バザル枝ヲ去ルコ  
 及ビ再耕、切斷、耕耘等ノ諸業ハ毎年ニ之ヲ行ヒ  
 五年ニ至レバ全備セル葡萄樹トナルベシ  
 植附テ根ノ生ゼザル者ハ倒樹法ヲ用ユベシ其  
 方法ハ小渠ヲ作り根アル蔓ヲ横ヘ植ル其ハ多  
 ノ新苗ヲ發生シ皆一新株トナル爾後之ヲ分  
 ツキハ即多ク分根ヲ得ベシ  
 葡萄樹ハ善ク保護スレバ永ク生活セシムベシ  
 葡萄樹ハ法國第一ノ富ニメ國中殆ト之ヲ植ヘ  
 ザルナシ其種類數様アリ皆上等ノ菓ヲ結ブ之

ヲ以テ國産ノ葡萄酒ヲ釀造ス  
酒造ノ工業部ニ出

學業捷徑初編上終







